IS－証－

アヌービ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－証－

【Ｎコード】
Ｎ２５１３Ｔ

【作者名】
アヌービ

【あらすじ】
アニメを見て原作も読んだので、ちょっと青臭いオリ主系で書いてみたくなった。
一夏の扱いに困ったら友人が「そんな時はＴＳだ！」と進めてきたので女の子一夏もヒロインにしてみた。
想像の導くまま書いたので色々破状してますが、まぁ暇潰し程度にお読み下さい。
一応皆が好きそうなハーレム展開とか修羅場とかヤンデレとかＴｏＬＯＶＥるな展開も含めて書いてみますので。

あらすじはまぁ…非転生オリ主によるＩＳお話沿い？
一応アニメ基準にしてみます、分かり易いかなと思うので。

願いと力と産声（前書き）

転生なし、青臭い熱血系だけど素直なオリ主、一夏は女の子でマジヒロイン、ハーレムとＴｏ　ＬＯＶＥる的展開…と色々友人から注文つけられましたが、まぁ想像と情熱が導くままに書いてみました。こちらに投稿するのが初めてなのでちょっと戸惑ってますが、細々と続けられたらいいなーと。
捏造設定と独自設定に妄想設定が入りますがご容赦下さい、オリ主物なので当然と言えば当然ですが一応。
最大の難点は、ヒロインを空気にしない事か…特にＨさん。
暇潰し感覚でどうぞ。

小説タイトルと各話のタイトルが浮かびません、適当でも良いのかな…。

願いと力と産声

強さに憧れた。
ただ只管に。
ただ直向に。
憧れて、羨んで、嫉妬して、絶望して…。
それでも強さに憧れた。
空を舞う姉の姿に憧れた。
剣を振る姉の姿に憧れた。
自分では届かない場所にいる、姉達に憧れた。
だから、必死に走った。
持って生まれた才能も、輝く何かも持っていないけれど…。
ただ走るしか、続ける事しか出来なかったけれど…。
強さに、憧れた。

守れる強さに、憧れていた…。

冬の寒さが北風によって更に強く感じる季節。

公共の試験会場の出入り口で、ガラス扉越しに外を見つめる少女。

黒髪を後頭部で纏めた少女は、時折時計を気にしながら外を見つめる。

と、物憂げな少女の表情に彩りが生まれる。

ガラス扉の向こう、会場の正門から足早に掛けてくる人影。

白い息を規則正しく吐き出しながら、駆け抜けてくる。

少女が嬉しそうに手を振ると、人影は少女に気付いて更に速度を上げる。

「お待たせ、一夏ッ」

「待ってたよぉ、和季！」

薄っすらと汗をかきながら、自動扉を潜って入ってきた黒髪の青年は。

彼の到着を待ち望んでいた少女を軽く抱きとめる。

「全く、受験票を忘れるなんて…一夏の大事な所でうっかりする癖も大概だよな…」

「うぅ、言わないでよぉ、千冬姉に散々言われてタコが出来てるんだから…」

和季と呼ばれた青年の言葉に、耳を塞いでイヤイヤと首を振る。

少女の名前は織斑　一夏、今年とある学園を受験する中学三年生。

青年…いや、少年の名前は織斑　和季、目の前の少女の双子の弟である。

似ているようで似ていない二人だが、彼らが家族であり姉弟である事は変わらぬ事実。

「それより汗拭きなよ、風邪ひくよ？」

ハンカチを取り出して額の汗を拭こうとする同い年の姉の行動に、頬を軽く赤くするがされるがままの和季。

人気が少ないとは言え公共の、しかも試験会場だ、当然見ている人は居る訳で。

「一夏、恥ずかしいから良いって…」

「良くない！　和季の入試は来週なんだから、風邪でもひいたら大変でしょ！」

控えめな弟の主張は、めっ！　と叱る姉の言葉に負けてしまう。

「そ、それより、試験は大丈夫なのか？　一夏が落ちるとは思えないけど…」

「あー、うん、そこはまぁ、一応代表候補生の意地があるからね。試験教官に勝つくらいしないと、千冬姉に何言われるか…」

たはは…と苦笑いする一夏、彼女はこの歳で既に専用ＩＳを持つ代表候補生。

ＩＳ、インフィニット・ストラトス――――

本来は宇宙空間での活動を想定・開発されたマルチフォームスーツ。女性しか扱えないという致命的な欠点を抱えているにも関わらず、その圧倒的な性能から現代兵器を全て過去にし、抑止力の要にまで僅か数年で上り詰めた世界で一番有名な兵器。

女尊男卑の風潮を生み出す原因になった存在だが、各国がこのＩＳを研究開発をする事で世界的に技術力が上昇したのは確か。

そのＩＳは、４６７個しかＩＳコアと呼ばれる重要機関が存在しない。

開発者の篠ノ之　束が製造を止めて、その上行方を眩ませた為に、世界はこの数少ないＩＳコアを管理・維持運営に努めている。

その貴重なコアを使った機体を、専用に出来るのが各国の代表、スポーツで言う国家代表選手のような意味合いが強いが、それと代表の卵、つまり候補生達。

ＩＳを使える女性は数多く、その中から４６７機の椅子を巡って争う候補生選抜。

幼い頃から英才教育を受けた少女でも、天性の才能がある女性でも。候補生としての力量が満たせなければ得る事が出来ないエリートの証。

それを、織斑　一夏という少女は、ＩＳの勉強と訓練を始めて僅か数年で並み居る競合達を打ち倒して代表候補生の椅子を勝ち取った。

その才覚と強さは、ブリュンヒルデの再来とまで言わしめる程。

当の本人は、流石に千冬姉には遠く及ばないと飄々としている。

一夏と和季の姉である織斑　千冬、彼女こそ初代ブリュンヒルデにして現在でも人類最強という看板を背負う存在。

全てのＩＳ操縦者の憧れにして目標。

そんな姉を持つ一夏への期待は、想像するのも恐ろしいモノがある。

だが一夏はそのプレッシャーや諸々を飄々とかわし、撃ち破り、今に至る。

代表では無いとは言え、各国１０席にも満たない専用機持ちという栄誉。

その証が、一夏の右手の手首で光りを反射する。

白いブレスレット、それが彼女のＩＳの待機状態。

白式――――

千冬曰く、特別な意味を持つ機体。

たった一つ、近接戦闘用ブレードである雪片弐型のみで戦い抜けるその姿は、千冬の現役時の姿を彷彿とさせるらしく、既に彼女にもファンが出来始めている。

そんな姉二人の弟である和季は、取り立てて周囲に騒がれるような面は無い。

男性なのでＩＳは動かせない、剣では一夏に勝てない、戦いでは千冬に遠く及ばない。

毎日身体を鍛え、肉体を引き締めているが、それも発揮する場所が

無ければ目立つ訳も無く…。
彼は、織斑　千冬と織斑　一夏の“弟”という立場でしかなかった。
「一夏なら相手が、それこそ千冬姉じゃない限り勝てるさ」
「そうだと良いけどね、でも世界は広いし。と言うか千冬姉が相手なら玉砕覚悟しないと無理」
立ち向かえないと苦笑いする一夏。
双子揃って、家長であり親愛と畏怖を同時に抱く姉は怖い訳で。
「ま、やれるだけやるよ、ね、『白式』」
自分の手首に巻きついた相棒に笑いかける一夏、その姿を見て、僅かに、本当に僅かに、和季の顔が歪む。
それは、遠く眩しいモノを、ただ眺めるしかない子供のように。
深い海の底から、大空を自由に舞う鳥を眺める魚の瞳のように。
諦めと絶望を知りながら、抱きながら、それでも諦める事が出来ず、前に進む事しか出来ない、知らない、愚者の歩み。
「…和季？」
「ん？」

一夏が双子の弟の違和感に思わず声を掛けると、普段通りの反応。

気のせいかと思い、そろそろ試験の時間だと気付く。

態々受験票を届けに来てくれた弟をこれで返すのは気が引けると言うか、出来るなら試験を見届けて欲しい、弟の応援が欲しいと思う一夏は、世間一般的にブラコンと呼ばれる生き物であり。

そんな姉の戦う姿を見守り、応援したいな～と思っている和季もまた、世間一般的にシスコンと呼ばれる生物（ナマモノ）である。

どちらもその事に気付いていない辺り、実に双子だ。

「あ、和季それ寄りかかって大丈夫？」

「え？」

ふと、会話している間に和季が寄りかかっていた、シートを被せられ台車に置かれた物体。

呑気に会話をしていたシスコン・ブラコン姉弟の背後で、静かに出番を待っていたソレ。

和季が振り返ると同時に、引っ掛かったのかシートが外れて姿が露になるそれは、今世界を動かしているとすら言われる存在の一つ。

試験で使われる機体の予備なのだろう、展開状態で台車に置かれた、一機のＩＳ。

一夏が驚き、和季が慌ててシートを直そうとそれに触れた瞬間。

彼と彼女の物語が、幕を開けた――――

いつから強さを求めたのか、もう思い出すのも難しい位、昔の話。

物心付いた頃には、彼の家族は姉と双子の姉の、３人だけ。

両親は居ない、何故居ないのか彼は知らない。

一度だけ、上の姉に聞いた、何故自分には両親が居ないのかと。

姉は答えた、「私の家族はお前たちだけだ」

その言葉と、その時の姉の顔だけは、今でも鮮明に思い出せる。

だから、彼は両親について初めから居ないのだと思うことにした。

寂しくはあれど、悲しくなど無かった。

何故なら、自慢の姉と、いつでも一緒の双子の姉が居るのだから。
ただ、そんな姉の力になれない、幼い自分に苛立ちを覚えた。
まだ若い姉は幼い自分達を育てる為に、大変な苦労をしてきた。
そんな姉の力になりたくて、まだ世間を知らない子供の彼は、ただ我武者羅に力を求めた。
運が良い事に、彼は人より優れた身体を持って生まれてきた。
鍛えれば鍛えただけ身体が強くなり、病気にも怪我にも負け知らず。
だが、彼は弱かった。
最初の敗北は、幼馴染と言える少女。
双子揃って学びに行った剣道の道場で、彼は完膚なきまでに叩きのめされた。
確かに相手は道場の家の娘で、並々ならぬ実力を既に持っていた。
だから負けてもおかしくは無かった。
だが、自分と同じに剣道を始めた双子の姉は、そんな幼馴染を瞬殺するほどの剣の冴を見せた。
力が欲しいと思ったのは、その時が初めてだった。

いくら身体が恵まれていても、いくらイジメや喧嘩から被害者を守っても。

彼は、弱者だった。

歳を重ねるにつれて、彼の想いは脹れて行った。

そんなある時、事件が起きた。

後に『白騎士事件』と人々に刻み込まれた大事件。

日本を射程に捉える全ての国のミサイル基地が一斉にハッキングを受け、２０００発を超えるミサイルが放たれた今世紀最大の出来事。

しかしその一発たりとも日本に辿り着く事無く、迎撃された。

他でもない、世界で最も有名にして最初のＩＳ、『白騎士』によって。

その事件を見て、彼は思った。

あぁ、あんな力が欲しい、あんな力が在れば自分だって…。

だが、現実は残酷だった。

強烈なデビューによって世界にその価値を示したＩＳ、だが登場から１０年近く経つ今ですら解決できない致命的な欠陥。

女性しか動かす事が出来ない――――

それが、彼を絶望させた。

そして、そのＩＳを上の姉が操り、日本の代表となり、世界大会で総合優勝をもぎ取り、世界最強となった。

それが、彼の想いを加速させた。

強さが欲しい、力が欲しい、誰にも負けない、そんな力が――――

彼は姉に縋った、ＩＳは動かせなくても、世界最強である姉なら、自分に力を与えてくれると思って。

だが、姉はそんな彼を突き放した。

ＩＳに触れるどころか、そのＩＳの知識を得る事すら許してくれなかった。

双子の姉には、好きにしろと許可を出したのに…

それが、彼の心に重く圧し掛かった。

幼馴染と別れる事になっても、彼と双子の姉は剣道を止めなかった。

彼が止めなかったのは、諦めたくなかったから。

双子の姉が止めなかったのは、双子の弟が止めなかったから。

鍛えていれば、いつかは追い付ける、亀だって兎に勝った、なら自

分だって…！

彼は、諦める事なく身体を鍛え、強さを求めた。

そんな折、転入してきた少女と知り合った。

海を挟んで隣の国から来た少女は、心無いクラスメイトにイジメを受けていた。

小学5年にもなると喧嘩にも手が出るようになる。

クラスの男子数名相手に少女を守る為に割り込み、相手が手を出してきたので反撃をした。

剣の才は無くとも鍛えた彼と、普通の少年では地力が違いすぎた。

多対一の状況でありながら、彼はほぼ無傷で相手を叩きのめし……尊敬する姉が、イジメの加害者である少年達の親に頭を下げるという結果を残した。

少年達がイジメをしていたのは周知の事実であっても、彼はやり過ぎた。

相手の両親は謝罪に来た相手がＩＳの日本代表と知って逆に萎縮してしまい、痛み分けという結果にはなったものの…

彼は、自分の愚かさと情けなさに、掌の皮膚を爪で突き破る程拳を握り締め、何も言わない姉にただ、土下座するしか出来なかった。

行き過ぎた力はただの暴力、それを知った彼は、偉かったよと言う

双子の姉と、ありがとうと礼を言うイジメられていた少女の言葉に、力なく笑うしか出来なかった。

誰かに誇れる強さが欲しいと、強く思った―――

時が進み、上の姉がＩＳの世界大会、その第二回大会へ出場した。

時を同じくして、彼と双子の姉が誘拐された。

抵抗し、せめて双子の姉だけでも逃がそうとした彼は…無残に叩きのめされ、悔しさと絶望に唇を噛み切り、涙した。

自分は何故弱いのだと、何故大切な人を守れないのだと…

拘束する必要が無いくらい痛めつけられた彼は、傍らで涙を流しながら声をかけてくる双子の姉の泣き顔を見上げながら思った。

あぁ、強さが…力が欲しい…

誰にも負けない…誰にも馬鹿にされない…

大切な…大切な家族を…大切な人を“守れる”強さが欲しい…！

世界大会の決勝を棄権し、助けに現れた姉の腕に抱かれながら、彼はその日の悔しさと絶望を心に刻み付けた。

それからの彼はどこまでも愚直で貪欲で…直向だった。

上の姉が、自分達を救出する際に情報をくれたドイツ軍に教官として出向すると聞いて、彼は自分も連れて行ってくれと土下座した。

当然姉は却下した、ＩＳが関わる事に触れさせない姉としては当然であり、何より1年もの長い期間だ。

だが彼は姉が頷いてくれるまで粘った、断食し、連れて行ってくれるまで頑として動かなかった。

そして、終に姉が折れた。

向うでは彼女の命令は絶対、ＩＳには関わるな。

それを守るなら連れて行って向うの軍人と同じ訓練を受けさせてやると。

双子の方の姉は二人目の幼馴染に苦笑しながら溢した、家の長女は、実は弟に激甘なんだよ…と。

姉が掛け合い、彼は彼女と共に外国の地へ降り立った。

何か目的や理由があった訳じゃない、ただ、姉という絶対の強さの象徴を間近に見ながら、自分の強さを探したかった。

暴力ではなく、ただ振るうだけの力ではなく、大切なモノを守れる強さ。

異国の地で、ブリュンヒルデの弟という色眼鏡と差別的な対応。

それすら糧にしてやると、貪欲に訓練に参加し、強さを探す彼。

期間が終わり、帰って来た彼は、妙に静かな雰囲気を持っていた。
双子の姉が問い掛けた、「強さは見つかった？」と。
彼は答えた、「自分が、諦めの悪い馬鹿だって事だけは、分かった」と。
そして、彼は今も、探し続けている。
愚直に、貪欲に、直向に。
いつか、いつの日か―――
自分が、『・・・・　・・・・』であると、胸を張って言える様に…。

そして、その日は目前に迫っていた。
何年も蛹で居た少年は今、羽化を迎えようとしていた……

「……ガフ…」

思わず吐血する幻覚症状をリアルに感じる程に、彼こと織斑　和季の身体、主に胃はダメージを受けていた。

風邪知らずの怪我知らずで通った彼の恵まれた肉体も、ギラギラドロドロとした乙女と書いて肉食獣と読みそうな少女達の視線に耐えられないらしく。

入学式が終わり早くも授業開始な学園生活。

ＩＳの専門的な知識、仮にも世界最強の兵器を扱う以上、普通の学校と同じスピードでは学び切れない為、授業はみっちり詰まっている。

その一発目、今はＳＨＲだが、これが終われば早速授業。

だが、和季はこのＳＨＲすら乗り越える自信が無かった。

視線が刺さるって表現が本当とは……――――

知りたくなかった事を知ってまた一つ大人になった和季。

近代設備をこれでもかと投入して作られた教室の真ん中、よりにもよってクラス中から見える位置に座らされた和季。

チラリと隣に視線を横にやれば、飄々とした双子の姉の横顔。
反対に視線を向ければ、懐かしい幼馴染の顔…だが直ぐに視線を逸らされる。
　おうジーザス、神様私は何か貴方に恨みを買う様な事しましたか…――――
信じてもない神に謝ってしまう位、彼の精神は一杯一杯。
世界で一番受験の競争率が高いとすら言われる学園、ＩＳ学園。
アラスカ条約の中に含まれた協定に基づいて設置された、ＩＳを学ぶ為だけの学園。
ＩＳが女性しか扱えない以上、ここには基本女性しか在籍できず、存在しない筈。
だが、唯一の例外がここに存在した。
織斑　和季、世界で初にして現在唯一の男性適合者。
あの日、姉である一夏が忘れた受験票を届けに公共の会場へやってきた和季は、搬入待ちだったのか通路でシートを被せて置いてあったＩＳに触れてしまい…。
起動・装着してしまった上に、それを搬入しようとしていたＩＳ学園職員にバッチリ目撃され。
あれよあれよと話が流れ、今日この日、ＩＳ学園へ入学する運びと

なった。

かつて憧れたＩＳという力を手に入れた。

その事は純粋に嬉しかった、長女に憧れ、次女に嫉妬し、全ての女性を羨んだ。

その力を扱う事を、許された。

だが、そんな嬉しさを一時とは言え吹き飛ばして塗り替えて染め上げる位の状況が待っていた。

最終鬼畜３６０度全部女子。

気のせいか空気まで甘ったるく感じるこの空間。

長年、千冬と一夏と三人で暮らして女性に耐性があるとは言え、流石にこの視線は辛く重い。

ＩＳは女性しか扱えない、つまり女性しかいない。

そして最近はそのＩＳ関連の仕事、研究者から整備や関連仕事のスタッフまで、女性で埋ってしまっていた。

流石に研究開発やＩＳ開発をしている会社に行けば男性も多いが、最先端・重要施設になるに連れて女性比率がドカンと上がる。

そして女尊男卑の風潮からか、草食男子が増えて出会いの機会がゴ

リゴリ減った女性達は、男に餓えていると言っても過言ではなかった。

ＩＳ学園、学園なら普通は恋と青春が華を咲かせるのだが、ＩＳ学園で恋は花咲かない、相手が居ないから。

百合の花を咲かせるのも多いが、大多数はノーマルだ、その筈だ、そうだと思いたい。

名前の順番的に自分より前になる姉の一夏が自己紹介をしたら、あちこちから聞こえる「あの千冬お姉様の妹の…」とか、「あぁ、姉妹揃って有名…」とか、「千冬様も良いけど一夏様も良い…」という、語尾にハートマーク飛びまくりの言葉が怖い。

そしてそれを気にしない姉は、多分天然なんだと今更ながらに思う。

「じゃぁ次、織斑　和季君！」

副担任だという、副担任より制服着て生徒やってた方が絶対に似合う眼鏡の女性、山田　真耶がその顔に似合わぬ母性をたゆんたゆんさせながら和季の名前を呼んだ。

現在ＳＨＲの時間を使っての自己紹介、学園なので基本的な催しだろう。

一応軍事学校の側面を持つのだが、女の子ばかりだからかやはり雰囲気が甘い。

「はい…」

若干緊張しつつ返事をすると、何故か山田先生がビクッとした。
どうやら緊張した声が、怒っている声に聞こえたらしい。
「ご、ごめんね、でも次は名前の順番で和季君の番で、あ、もしかして馴れ馴れしく名前で呼んじゃったからかなっ？　織斑が二人いるから本当は良くないけど間違えると大変だしって思って、ご、ごめんね、気に障ったなら織斑君と織斑さんでちゃんと呼び分けるからっ！」
テンパってるのか、わたわたと手を振りたゆんたゆんと揺らす山田先生。
「いえ、別に怒ってませんから、名前も好きに呼んで頂いて結構ですし…っ」
「ほ、本当？　ありがとう織斑君…」
慌ててフォローすると感動された、本当に教師なのか疑わしくなったが、今は自己紹介が先か。
「っと、織斑　和季です……織斑　一夏とは双子で弟です」
双子の弟という部分で、教室がざわめく。
―――　一夏さんと双子って事は千冬様の弟って事？　ＩＳ動かせるのもそれが関係して…？
―――あぁ、いいないいなぁ、代わって欲しいなぁ…！

――――双子…にしては似てないわね、美形だけど…。

――――かずっち背高いねー、肩車して欲しいなー。

などなど、ざわざわとざわめくが、次の言葉を待つように直ぐに静かになる。

そして彼女達の視線はギラギラ光り、さぁ次はどんな言葉を！？と期待に溢れている。

和季は心の中で絶叫した、止めてくれ、これ以上ハードルを上げないでくれと。

「その、俺は弱いです。ガタイはでかいけど剣の腕は一夏に敵いません、鍛えても長女に簡単に負けます…」

突然の弱い発言に、唖然としたのか教室の空気が固まる。

そんな中普通に、と言うか苦笑しいるのは姉の一夏。

――――私は兎も角、千冬姉と比べたら誰も勝てないって…。

引退するまで無敗だった人類最強に勝てる方がどうかしてる。

身内としては、あの姉に勝てる人間がいるのかと思うほどに偉大で強大でおっかない訳で。

セ〇ールとかシ〇ワちゃん呼んでこないと無理臭い。

「でも、強くなりたいです。俺は俺だって胸を張れる位…強くなり

たいと思っています」

静かに、しかしハッキリと言い切ったその言葉は宣言で。

それを聞いた少女達は、概ね好意的に彼の言葉を受け入れた。

女性が強い、男性が弱い、そんな風潮の中強くなろうとしている和季の言葉と姿は凛々しく映ったのだろう。

男性に免疫の無い数名は、頬を赤らめている。

そして一夏の視線が冷たくなって弟を睨んでいる。

――何故睨むのか、マイシスター…

――自分の胸に聞け、この無自覚誑し…！

視線で会話出来るのは双子ならではか、焦る弟に冷たい視線を浴びせ続ける姉。

戸惑いながら以上ですと告げ、席に座る。

と、そのタイミングで扉が開いてスーツ姿の織斑　千冬が入ってきた。

姉がこの学園で教師をしている事は、和季は知らなかった。

一夏も代表候補生になるまで知らなかったらしい。

仕事でずっと家に戻らず、しかし家族3人を十分養える仕事。

なるほど、確かに現役無敗にして引退後も人類最強の看板を背負っている姉なら、ＩＳ学園は喉から手が出るほど欲しいだろう。

「諸君、私が織斑　千冬だ」

なんとも軍隊みたいな自己紹介をする姉に苦笑する一夏だが、ドイツで実際に教官として指導していた姿を知る和季は、懐かしいと思う。

―――そう言えば、ラウラは元気かな…。

ドイツの地で、出来損ないと呼ばれた少女。

心を閉ざし、ただ兵器でいようとする彼女と交わした絆。

あの大地で元気にしているだろうか、遠い地に想いを馳せていると、強烈な視線が二つ。

―――誰の事考えてるのかなぁ～？

以心伝心な双子の姉の絶対零度な瞳。

それとは逆に、何やら拗ねたような視線は、幼馴染の方から。

視線を向けるがやはり即逸らされる。

はて、どうしてだろうか、もしかして嫌われてる…？

そう考えると、そう言えば昔軟弱者と叱咤された記憶が和季にはあ

った。

一夏どころか、彼女、篠ノ之　箒にすら負けていた和季。

昔から自他共に厳しく、昔気質というか武士娘と言うか…。

彼女にしてみれば、弱い和季は受け入れられない存在なのかもしれない。

———折角再開出来たのだから、仲良くしたいが……。

チラリ。

ぷいっ。

……無理臭い。

そう思った和季はきっと悪くない。

「お疲れ。いきなり弱い宣言するから何事かと思ったよ」

「仕方ないだろ、他に思い浮かばなかったんだ…」

自分でもあれは無いと、今更ながらに思い始めた。

女尊男卑な昨今、男が弱いのなんて当たり前的な考えが根付いてきている。

例え男性で初のＩＳ操縦者だとしても、やはり女より下だという考えは当たり前にあるようで。

「ちょっと良いか、二人とも…」

と、そこへ声を掛けてきたのは、二人の共通の幼馴染、篠ノ之　箒だった。

「箒…」

「えっと、久しぶり…」

何やら神妙な様子の箒に眼をパチクリする一夏と、どう接すれば良いやらと困惑気味の和季。

そんな二人の様子に気付いているのか居ないのか、二人を廊下に連れ出す箒。

代表候補生で千冬の正統後継者なんて言われ始めている一夏と、そんな姉二人を持つ和季に話しかけようと獲物を狙う肉食獣のように様子を見ていたクラスメイト達は、横から掻っ攫われて虚しく手を伸ばすのだった。

「えっと、久しぶりだね、箒。元気だった？」

「あぁ…」

一夏が勤めて明るく話しかけるが、箒は何やら口が重そう。

「あー…箒、全国大会優勝おめでとう」

何か話題は無いかと記憶を探ると、そう言えば新聞で箒が剣道で全国優勝した記事を見た事を思い出し、祝福する。

「な、何故和季がそれを知ってる！？」

すると箒は途端に真っ赤になって和季に食って掛かってきた。

照れ隠しにしては勢いあり過ぎな箒さん。

「いや、普通に新聞とか…」

「ニュースでも取り上げてたよね？」

篠ノ之　束の妹云々は当然書かれていない、普通のスポーツ欄の記事だ。

女性の活躍を多く取り扱うようになってきた新聞の記事、当然剣道などの武道関係の優勝者とかも取り上げられる。

「ふ、二人揃って何故見るんだ！？」

「箒、とりあえず落ち着こう？」

「支離滅裂過ぎだろう…」

一夏がどうどうと赤くなり慌てている箒を宥め、和季が自分の額を

軽く押さえる。

「だ、大体、それを言うなら一夏はどうなのだ、気が付けば代表候補生にまで…」

「あー、うん、まぁ色々あってね…」

困ったように頬をかく一夏、彼女は昔、箒が引越しする頃からＩＳには乗らないと思うと話していた。

周りの子供達がＩＳすげー、ＩＳ乗りたいと騒ぐ中の発言なので、箒も、当然和季も覚えている。

そんな一夏が今や代表候補生、箒の言葉も最もだ。

「和季は……その、剣道は続けているのか？」

聞き難そうに、伏せ眼がちに問い掛ける箒。

それを見て昔を思い出していた和季は、彼女の問い掛けの真意に心当たりがあった。

姉の一夏と違い、大して上達しない剣の腕。

常人に比べれば十分上達しているのだが、比べる相手、道場の同年代が一夏と箒しか居なかった為、和季は一番弱いというのが箒の認識だった。

それ故、昔は軟弱者、だらしない、それでも男かと事ある毎に叱咤し、最終的にはお前には才能が無い、止めてしまえとまで言ってし

まった。

それを今更…いや、大人になって後悔しているのだろう。

「続けてる…って言って良いのかな。一夏と軽く打ち合う程度だ。俺に剣の才能は無いから、練習相手にしか…」

ひょっとしたら、それすら出来ていないかもしれない。

剣の冴えは下手をすれば千冬を越えるかもしれない一夏。

剣を握った一夏に、和季は勝った例が無かった。

「そ、そうか…」

「そう言えば、先生は元気か？」

落ち込んだ様子の箒に、先生、つまり箒の祖父であり剣道の先生の事を問い掛ける和季。

彼なりの精一杯の話題の転換だったが、連絡は取っているがあまり逢えないとの答えで話題終了。

計った様にチャイムが鳴り、三人は微妙な空気を残して教室に戻るのだった。

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

先ほどの授業の復習をする和季、一夏と箒は一緒にお手洗い、この辺りは女の子の連帯感と言うか暗黙の了解的な何かがあるのか。

先ほどの授業でＩＳの特性や機能について学んだ事を忘れる前に自分なりの方法で覚えようとする和季。

何せ和季はクラスメイトに比べかなり知識面でも技術面でも遅れている。

当然だ、ＩＳの勉強なんて男には関係ないし、あのＩＳうっかり起動事件まで動かせる事すら知らなかった。

別に男性でもＩＳ関連の書籍が出ているからある程度は学べるが、長女がそれを許してくれなかった。

思春期の男の子の宝より念入りに調べられ、友人の弾が勧めてきたグラビアはＯＫでＩＳ操縦者の写真集が何故駄目なのか。

隠しておいた弾一押しの姉系のお宝本が机の上にキチッと置かれ、ＩＳコスプレ物が何故か焼却処分されていたのは記憶に新しい。

あの時は一夏が慰めなければ首を吊っていたかもしれない。

母の要らぬ気遣いならぬ、姉の余計な気遣い。

姉系のお宝本が消えたかと思えば、双子物というマイノリティ本が置いてあったのは何の怪異か。

あと最近弾が妹系を進めてくるのはなんなのだろうか、妙に悟った顔で「俺も兄貴だからよ、せめて応援位しないとだろ…？」と意味不明な言葉。

話がだいぶ逸れたが、兎に角和季はスタートの出遅れを埋めるのに必死だった。

学園から届いた教本は毎日夜遅くまで睨めっこし、分からない所は一夏に聞いたが、実は一夏も自分の機体とその機能以外はあまり詳しくなく、本当に腕前だけで代表候補の座をもぎ取ったのだと和季は悟った。

あの姉にしてこの妹ありという奴である。

身長１８０近い男が必死こいて復習していると掛けられた声。

周りの和季に話しかけたい子は、その鬼気迫る様子を察して声を掛けるのを諦めてくれたのにそんなの関係ないですわと声をかけてきた。

「まぁ、この私が話しかけているのになんですのその気の抜けたお返事は？」

そこに居たのは、金糸の髪も眩しい美少女だった。

全世界からＩＳ学園へ生徒が集うのだ、当然外国産の美少女だって

居る。

と言うか、ＩＳ学園は受験項目の中に容姿も入っている気がしてならない和季。

クラスメイトも普通に美少女だらけだ、あまり女性の美をランク付けするのは好きじゃない和季だが、一番下の子でも他の学園ならクラスに一人は居る可愛い子レベル。

ＩＳ世界大会であるモンド・グロッソは美と強さを競っていると良く言われるが、やはり容姿も必須項目なのか、厳しいなＩＳ学園。

「聞いてますのっ？」

「あぁ、すまない、下らない疑問に答えを求めてた。それで、何か用かな？」

「まぁ、なんて失礼な。この私がわざわざ話しかけてきたと言うのに、何の用かですって」

馬鹿にしてますのと何故か喧嘩腰。

女尊男卑の風潮から男を見下す女性が増えている、彼女はその典型に感じられたが、特に和季はそれをどうこう言う気はない。

結局の所、女尊男卑は今までの男尊女卑がひっくり返っただけの話だ。

何かにつけて下に見られ苦労してきた女性が、ＩＳの登場で立場を変え、今までの鬱憤を晴らす形になっている。

女尊男卑があーだこーだ言っているが、女性は今までそれに耐えてきたのだ、そしてその中で自分達の立場を高めていった、雇用や社会的立場然り。

なら次は男性の番、ただそれだけの話だ。

行き過ぎた女尊男卑、女は超偉い、神だ、男は下僕、奴隷だ、そんな考えは同じ女性からも淘汰され痛い目に遭うだろう。

話が逸れたが、和季は別に目の前の少女の態度に、腹を立てる事も無く普通に対応していた。

「用が無いなら復習に戻って良いか、知っての通り俺は皆からだいぶ遅れてのスタートなんだ」

基礎知識でも軽く混乱してると告げると、鼻で笑う彼女。

「呆れた方ですわね、けれどその勤勉な態度は評価して差し上げますわ。まぁ、私に追いつくのは１００年かかっても無理でしょうけれど」

なんてったって、私イギリスの代表候補生ですから。

と、とても誇らしげに胸を張る少女。

イギリスの代表候補生か、そりゃ凄いと素直に感心する和季だが、少女はそんな和季の態度と言葉に引っ掛かった。

「…もしかして、私が代表候補生だと知らなかったんですの？　こ

の私が、セシリア・オルコットがイギリス代表候補生だと！」

「あぁ、うん、すまない勉強不足だった」

ずずいっと迫る彼女に仰け反りながら謝罪する和季。

その謝罪の中には、自己紹介中箒や一夏の視線を気にしていて後半全然聞いてなかった、つまりセシリアの名前すら知らなかった事への謝罪も含まれていたり。

「ふんっ、男性初のＩＳ操縦者と聞いたから期待しましたのに、とんだ期待外れですわ。まぁ、どうしてもと頭を下げて頼むのなら、この私がＩＳについて教えてもよろしくてよ？」

「あ、その辺はもう間に合ってるから」

一夏と一緒に歩む形で学ぶ予定なのでサラリと断ると、ビキッとセシリアが固まった。

「な、ななな、なんですってぇっ！？」

急に噴火したセシリアに目をパリクリさせていると、チャイムが鳴り響き。

「くっ、命拾いしましたわね、覚えてなさい！」

と、彼女は席に戻っていった。

「え、俺命の危機だったの…？」

「う～ん、かずっちも大変だねー」

よしよし、い～こい～こー…と、甘え袖の女の子に背伸びしてまで頭ナデナデされて困る青年がそこに居た。

「さて、再来週のクラス対抗戦へ出場するクラス代表を決めないとな」

担当教師である千冬の言葉に、授業を受けていた少女達の態度が崩れる。

「はーい、織斑君が良いとおもいまーす！」

「え…」

クラスの代表、つまり一番強い生徒を決める話で、何故か一番弱い和季が推薦されてしまった。

次々に賛同する声が上がり、和季が拒否する間もなく決まりそうになる。

「はいっ、織斑さんが良いと思います、日本の代表候補生だし！」
と、待ったを掛けるように一夏を推薦する子が現れる。
確かに既に専用機を持ち、日本の代表候補生、実は４組にもライバルである日本の代表候補生が居るが、エリートの一夏。
何れは４組の子と凌ぎを削り、代表に選ばれるのが代表候補生。
いや、他にも居るが。候補生なのだし。
だが専用機持ちはそれだけでステータスだ、量産機より性能は上が殆ど、学園のように貸し出し申請やらなんらの面倒な手続きも要らない。
ＩＳ学園の生徒ほぼ全員の憧れが、専用機持ちという立場。
千冬の妹で代表候補生な一夏を推す声も多く、千冬がでは二名の投票とすると指示した所で、セシリアが勢いよく机を叩いて立ち上がった。
「納得いきませんわ！　男だからという理由での選出など、認める訳にいきませんわ！」
視線が集中するなか、堂々と言い切るセシリア、大した胆力である。
伊達にイギリス代表候補生をやっていないと言う事か。
「だいたい男が代表だなんて恥さらしも良い所ですわ！　そのような屈辱を私に一年も味わえとおっしゃるのですか！？」

実力から言えば自分が選ばれて然るべきだと主張するセシリア、これが普通の生徒なら自信過剰だが、彼女は専用機持ちの代表候補生。言うだけの実力と経験を持っている。

「入試においても、唯一教官を倒した私が相応しいですわ」

「ん、入試ってＩＳで戦う奴か？」

「それ以外に入試はありませんわよ」

和季の疑問に、何を言っているのかしらと呆れ混じれに返すセシリア。

「それなら俺と一夏も倒したぞ？」

「な！？」

和季の言葉に、驚きと共に目を見開くセシリア。

彼女が聞いた限り、入試で教官を倒したのは自分だけの筈だった。

「あ、私は和季のＩＳ動かしちゃった騒動で試験日ずれたのよ。だからオルコットさんが聞いた後じゃないかな？」

と答える一夏、因みに彼女の相手は副担任の山田先生、彼女は白式を纏った一夏を見事な腕前で翻弄していたが、勝負中一夏の髪が解け、それを見て山田先生が見惚れてしまったのだ。

――――わぁ…織斑先生そっくり……むしろ可愛い系の織斑先生…！？

言うまでもなく、千冬と一夏は姉妹である。

一夏は普段から髪を後頭部でアップに纏めているので気付き難いが、髪を下ろすと千冬とそっくり。

顔の丸みや目付きなどを含めて千冬より可愛い顔立ちであり、キリッとした美貌の千冬と凛とした愛らしさの一夏といった具合。

で、千冬に熱視線を送るのをＩＳ学園でも見受けられる山田先生、見惚れた上に慌てて半ば自爆、一夏の勝利となった。

因みに和季の相手も彼女。

こっちは普通に相手が男性でありしかも千冬の弟と知ってテンパってドジって自爆。

戦いとすら言えなかった、まぁ和季の場合勝っても負けても結果に関係なく強制でＩＳ学園に放りこまれる運命だったのだが。

「な、ななな…そんなの聞いてませんわ！！」

学園も態々生徒一人一人にそんな事言わない。

頭に来たのか極東の猿だの後進的な国だの的外れな批判を始めるセシリアに、クラス全体がなんだかなーと言った空気になってきた。

そろそろ止めるかと千冬が教卓を叩こうとした所で、セシリアが地雷を盛大に踏み抜いた。

「所詮織斑先生の七光りの彼女に私が劣っているとでも！？　大した実力もなく、どうせコネで代表候補生になったに決まっていますわ！」

「――――――おい」

「だいた…え？」

一夏の批判を始めた瞬間、腹の底から搾り出すような低い声がセシリアの口撃（誤字に非ず）を止めた。

声の主は和季、静かに立ち上がると普段の瞳からは想像出来ないほどの怒気を燃やし、セシリアを睨んだ。

「極東だの猿だの好きに言え、どこだって誰かが言ってる常套句みたいなもんだ。メシマズ国家と文化で言い合う気も無い。だがな、これだけは訂正しろセシリア・オルコット！　一夏は実力で代表候補生になった、お前が言うような下賤な憶測は何一つないんだよッ！！」

ガンッと教室全体が震えるような音を立てて机を叩き、敵意、いや、殺意とも思えるような剣呑な視線を向ける和季に、背筋に寒気が走るセシリア。

「俺の事なら好きに言えよ、ＩＳも碌に動かして無いド素人だ、全部事実だからな。だが一夏の事は訂正しろ、俺の家族への侮辱は例え相手が神だろうが絶対に許さんッ！！」

男らしい啖呵に、うんざり空気だった教室が驚いた空気に変わる。

今時、家族が馬鹿にされたからとここまで怒る男性も珍しいからだ。しかも自分の事は抜きに、一夏が馬鹿にされた事のみで怒っている。

箒も含めてクラスメイトが驚く中、一夏があちゃーと額を抑え、千冬が仕方ない奴めと呆れながら、しかしどこか嬉しそうにため息をつく。

「な、なんですのいきなり、これだから男というのは…」

「男がどうだの関係ない、俺の家族を侮辱したのを謝罪しろセシリア・オルコット」

「嫌ですわ、わたくしに頭を下げさせたいなら、それ相応の実力を示してみなさい」

「……敗北するまで謝罪しないと言いたいか」

「あら、極東のお猿さんでも少しは理解出来るのね」

完全に挑発をしているセシリア、これを機に和季を叩きのめし、自分の立場を確固たる物にしたいのだろう。

「おち、つけ。馬鹿どもが」

「いたっ」

「…ッ」

頃合かと千冬が出席簿でセシリアと和季の頭を叩く。
良い音がしただけに痛いのか頭を押さえるセシリアと、それでもセシリアを睨む和季。
「決闘をするなら話は早い、一週間後の月曜日に第3アリーナで試合を行う。勝った方が代表だ。それぞれ準備をしておくように」
千冬の鶴の一声で事態は終息し、授業に戻るクラス。
「あぁ、それと男の織斑には専用機が用意される。試合までには間に合う予定だから訓練機の貸し出し申請は出さなくて良いぞ」
「……分かりました」
何気なく告げた千冬の言葉に、微かに教室がざわめく。
一年のこの時期に専用機を持つなんて異例だ、それこそ代表候補生や、開発企業の娘とかテストパイロットでなければ専用機は持てない。
和季は腹の中で一夏を、一夏の努力を侮辱したセシリアへの怒りを煮え滾らせながら、自分に与えられる専用機の事を考える。
大方、初の男性操縦者のデータ取りだろう、どのような機体かは不明だが、普通の機体は来ないと思った方が良いかもしれない。
だがそれでも、そうであっても、和季は負ける気など端から存在しない。

和季にとって、家族、千冬と一夏は自分の命以上に大切な存在だ。
その家族を侮辱されたなら、傷つけられたなら、和季は命を賭してでも戦う。
それが、織斑　和季を名乗る上での和季の覚悟だ。
それだけが、織斑　和季である彼の、信念だ。
休み時間になり、話題を得たクラスメイトが無茶だよ、ハンデ貰おうよと彼女達なりのアドバイスを送るが、和季は全て首を横に振った。
彼女達には分からないだろう、和季の掲げた決意は。
――――折れず、枉げず、錆付かず――――
幼い心に誓った想いを守る、この決意を。
「熱くなり過ぎ、頭冷やしなよ和季」
ぴとっ、と頬に冷たい感触。
ブリックタイプの飲み物を持った一夏が、苦笑を浮かべて経っていた。
「心は熱く、頭は冷たく…か…」
「祖父の教えか…」

飲み物を受け取ると、既にストローを差して口をつけていた箒が和季の呟いた言葉に驚きを浮かべた。

「……出来の悪い門下生だったな、俺は…」

「和季…」

剣でも勝てず、勉強は一夏と平行線だが、家事は一夏の独壇場。

諦めの悪さしか取柄と言えない和季にとって、一夏は眩しい存在だ。

時に疎ましく思った、時に嫉妬し恨みもした。

だが、彼女は自分の双子の姉だ、掛け替えのない家族であり大切な人だ。

彼女が、彼女達が、姉達が居たから和季は、織斑　和季として居られる。

だから、彼女達を害する全てが許せなくて。

彼女達の力になれない自分が許せなくて。

「かーずき」

ぐにっと頬を引っ張られた。

「一人で抱え込まない、約束したっしょ。家族なんだから、私たちは」

笑顔を浮かべる一夏、彼女の笑顔に、彼女の存在に、自分は何度助けられた事か。

だからこそ助けたいと、力になりたいと、守りたいと思う。

「それにさ、私は和季のお姉ちゃんだよ？」

「ん…？」

「む…？」

胸を張り…箒に匹敵する母性を張りながら、胸を叩く一夏、揺れたのを和季は視線を逸らしてスルー。

いきなりのお姉ちゃん宣言に疑問を浮かべる和季と箒に、一夏は満面の笑顔で口を開いた。

「和季が負けたら私がオルコットをブチノメスから♪」

それはそれは素敵な笑顔での、抹殺宣言だった。

「「……」」

絶句する二人、お忘れか、和季がシスコンであるように…

一夏もかなり度の越えたブラコンであることを。

「で、道場を借りたは良いが、結局試合までどうすのだ？」

翌日の放課後、剣道や柔道などで使う建物でとりあえず剣道の胴着に着替えてやってくる箒。

一夏も和季もやはり剣道をする装備だ。

因みに、本来なら暫くは自宅から通うはずだった和季は、上の事情から無理矢理寮へと放りこまれ。

一夏と同室になった、別に双子なので何の問題もなく本日へ。

「まぁ、最初は箒に剣の方を見てもらって、後は日々のトレーニング？」

ＩＳが無い以上、出来る事は筋トレと戦術研究位しかない。

一応練習用に訓練用ＩＳの貸し出し申請を出そうとしたが、現在２年３年のクラス代表の選出などで埋っており、一週間後まで無理との事。

一夏の白式を貸す案も出たが、白式はかなりピーキーな上にブレードオンリーという何とも漢らしい装備。

和季専用の機体がどんなコンセプトの機体かも分からない以上、下

手に特化機での癖をつけない方が良いという判断から却下となった。
機体が分からない場合は訓練機のラファール・リヴァイヴが理想なのだが、打鉄共々売り切れならぬ借り切れ御免状態だ。
一夏と試合形式で打ち合い、その後和季とも試合をする箒。
試合が終わり、面を外した箒の表情は優れない。
「和季、そのな…」
「分かってる、“そこそこやれる”程度の腕前なんだろ？」
「あ、あぁ…」
言葉を濁すが、負けた和季の方は気にした様子は無い。
分かりきっている事だった、和季に剣の才能は無い。
どんなに努力しても、どれだけ続けても、凡人の域を出ることが出来ない。
同じ技量の相手なら戦えても、箒や一夏のような格上相手は確実に負ける。
瞬殺されないように粘るので精一杯、隙を疲れれば一撃で終わる。
「分かってるからさ、あくまで手段の一つとして考えてる」
剣だけで強くなれないなら、剣“も”含めて鍛える。

剣“道”を志す者からすれば邪道も良い所だが、和季にはそんな事に構っている余裕は無かった。

だから。

「空手、柔道、ボクシングに相撲…節操無さ過ぎだよ、って言うか相撲って…」

これまで弟が手を出してきた武術を数えて呆れる一夏。

「弾に言われてな、既にある道が極めなられないなら、極められる物を作ってしまえ…とな」

「なんとも…呆れる話だ」

「だね。でもさ…和季らしくて良いと思うよ」

女二人で苦笑するが、その視線は優しい。

どこまでも愚直で、どこまでも諦め悪く、どこまでも直向で。

そんな和季だから、放っておけなくて、何かしてあげたくて。

一緒に居て、背中を押して上げたいと思ってしまって…。

「あげないからね、箒。私のだから」

「な、ななな、何を馬鹿な事を…ってどういう意味だそれは！？」

さらっと釘を刺す一夏と、真っ赤になりながら一夏の台詞が聞き捨てならないと問い詰める箒。

「おーい、筋トレ手伝ってくれないかー？」

ガールズトーク（？）で盛り上がる二人に放置されて、寂しそうな和季が主張してみた。

「正直な所、勝算はあるのか？」

「どーだろーねー」

「…っ、…っ、…っ」

上に、下に、上に。

「闇雲に戦って勝てる相手ではないだろ、仮にも代表候補生だ。性格はアレだがな」

「そーだねー、性格アレだけど専用機持ちだし、噂だと機体は第３世代みたいだしー」

「…っ、…っ、…っ」

下に、上に、下に。

「あの性格と憤慨ぶりを考えるに、もし負ければ何をやらされるか分からんぞ？」

「その時は私が何がなんでも止めるよー。全力でねー」

「…っ、…っ、…っ」

また上に、下に、上に。

「……いつもこんな鍛練をしてるのか？」

「大抵はねー、最近はこの動きも慣れてきたよー」

呆れ顔の箒の視線の先の一夏は、さっきから座った体勢のまま上下している。

その一夏が座るのは、タオルを敷いた和季の背中。

上下している理由は簡単、和季が腕立て伏せを行っているのだ。

一夏を背中に乗せて。

「結局ー、和季の一番の優れた点はタフネスと地力の高さだと思うんだー」

上下している為か、間伸びた声の一夏。

この背中に乗っての腕立て伏せ、慣れないと乗ってるだけで酔うらしい。

「幼い頃からずっと鍛えてきた頑丈な身体と体力か…ＩＳに絶対防御やシールドバリアーがあるとは言え、それを突破する攻撃方法もある。身体を鍛えるのに越した事は無いな」

「そーそー、威力が高〜い攻撃受けると〜、打撲とか〜打ち身に〜なる事が〜多いみたいだしー」

「その辺りは万能とは言い難いからな……ん？」

精神統一代わりに座禅をしていた箒が、ふと違和感に気付いた。

一夏の声は確かに間延びしていたが、ここまでのほほんとしていたか？と。

瞑っていた目を開けて見れば、まったりしている一夏と、その腕の中に抱えられ、ちょうど肩車的ポジションで和季に乗り、甘え袖をパタパタして上下している見覚えはあるが詳しく知らない少女が増えていた。

「いつの間に！？」

「あ、ほんとだ、のほほんさんいつの間に！？」

「いや、気付かないで抱いてたのか！？」

一夏が今気付いたと腕の中ののほほん少女こと、布仏　本音さんである。

一夏をおりむー、和季をかずっちと呼ぶ癒し系であり、既に一組のマスコットの座を会得しているある意味恐ろしい少女である。

「ん〜、なんかかずっちが楽しそうな事してたから乗ってみたー」

「和季は楽しくないと思うけどね。まぁ、重しが増えたって事で。

あと１００回ねー」

「…っ、…っ、…っ」

ダクダクと汗を流して腕立てを続ける和季、女の子とは言え二人分、のほほんさんが普通の子より更に軽いとは言えそこそこな重りである。

それなのに崩れずに続けられるのは、ずっと続けてきた鍛練の証。

制服を着ると分からない和季の肉体は、細くしなやかに、しかし引き締まった細マッチョだ。

割れた腹筋が妙にセクシー。

箒は良くやると感心と呆れを混ぜた視線で和季を見ていたが、ふと、唐突に思い出した。

「そう言えば、持久走だけは和季に勝てた事が無かったな…」

小学生の授業でのマラソンや、道場での走りこみ。

どれも、和季に勝てた記憶が無いと呟く箒だった。

そして試合当日。

借りたアリーナのピットで、三人は待ち惚けを喰らっていた。

理由は簡単、和季のＩＳがまだ届かない。

「なんか、悪意を感じるよね…」

「同感だ…」

ストレッチをする和季を眺めながら、頭を押さえる一夏と溜息を吐く箒。

既に試合時間まで残された時間も無く、このままだと初期化と最適化を行う時間が取れないだろう。

「もう私が出て行って叩きのめしちゃダメかな？」

「自重しろブラコン」

必ず殺るからと恐ろしい事をのたまう一夏をペシッと叩く箒。

弟限定で自重しない一夏、昔からとは言え頭が痛い箒だった。

「お、織斑くーんっ、織斑くん織斑くーんっ！」

と、バタバタたゆんたゆんと慌てて駆け寄ってくる山田先生と、その後ろを普通に歩いてくる千冬。

「来ましたっ、織斑くんの専用ＩＳが届きましたーっ！」

その言葉に待ってましたとストレッチを切り上げて立ち上がる和季。

専用ハンガーに遅れて到着したそれは、鉛色をした無骨な機体だった。

第一世代から主流のＩＳの見た目というのは、両手両足に装甲が集中し、操縦者の身体は最低限の装甲で覆われている物が多い。

全身鎧状の機体は開発はされてはいるものの、未だ世界に出ていないし、何よりＩＳを扱うのは見目麗しい女性ばかり。

その美も強調したいのか、基本的に女性の肉体を誇張する部分には装甲が無いのが現状だ。

シールドバリヤーに絶対防御が在る為にそうなったらしいが、美の強調の方が信憑性が高い気がする和季。

だが、今和季の目の前にあるのは、頭部と二の腕や太腿を除いた大部分が無骨な装甲に覆われる形。

「初期化と最適化を終えれば形状は操縦者に合わせて変化する、時間が無い。実戦で全て終えろ」

アリーナの使用時間制限があるとは言え、ご無体な事を言う千冬。

弟だからとＩＳで私情を挟まない辺りが彼女らしい。

ＩＳスーツに着替え、ＩＳを身に纏う和季。

心が高揚し、自然と動悸が早くなる。

自分が憧れた力、望み続け、一度は絶望を刻んだ存在。

それを今、身に纏う。

緊張と不安と高揚と感動を全て織り交ぜ、己に右手を見る。

無骨な機械の腕、第二世代から鋭く流線的な形状が多いＩＳにおいて、珍しい角ばった機械の腕。

それが今は、力強さを感じさせ、頼もしい。

「織斑くん専用ＩＳ、『玄鋼（くろはがね）』。打鉄の流を組む試作機でスペック上では高い防御力と突破力を持っています」

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな、気分は悪くないか和季」

「……あぁ、大丈夫だ、千冬姉」

人が少ないからか、姉の顔を覗かせる千冬に力強く頷く和季。

立ち上がり、カタパルトへ移動する前に見守る一夏と箒に向き直る。

「一夏、箒。行ってくる……見ててくれるか」

俺の戦いを。俺の想いを。

瞳でそう告げながら機械に包まれた両手を拳にして掲げると、二人は確りと頷いて、それぞれの手を拳にし、コツンと和季の拳を叩いた。

「行っといで、精一杯ね」

「見ているからな、和季」

「あぁ！」

二人の声援を背負い、カタパルトに両足を固定。

一度静かに深呼吸し、ピットの出口を睨む。

やっとこの場所へ立てた。

後は、ただ、走り抜けるだけ。

「織斑　和季、出る！」

コールと共にカタパルトが起動し、打ち出されるようにアリーナへ跳び出す和季。

試合の開始を今か今かと待つのは、クラス代表を決める戦いなのでクラスメイトのみ。

「やっと来ましたのね、怖気づいて逃げたのかと思いましたわ…あら？」

アリーナの空中で一人静かにまっていたセシリアは、ピットから飛び出し、そのまま地面を擦りながら着地して立つ和季に首を傾げる。

演出かと思う観衆のクラスメイトだが、妙だ。

ＩＳは戦闘機を無用の長物にしてしまう程に優れた空戦能力を持つ兵器。

そのＩＳを身に纏っているのに、和季は飛んでいない。

和季が飛ぶ気がないのかと思えば、戸惑っている様に見える。

「わざわざ負けて惨めな姿を晒すのかと思えば…やはり男、ＩＳをまともに扱えていないとは…笑わせますわ！」

「く……ッ」

セシリアの嘲りは本当だった、和季は飛ばないのではなく、飛べずに着地し、戸惑っている。

入試の時に装着した打鉄は普通に動かせたのに、何故か専用ＩＳである『玄鋼』は自分の思い通りに動いてくれない。

ハイパーセンサーは正常、操縦者のアシスト機能は動いているのに、ＩＳとしての大部分の機能が停止している。

まるで、ＩＳが拒むかのように。

「初期化と最適化が終了していないからか…どうした玄鋼！？」

「何をしてらっしゃるの、戦う気が無いのならさっさと降参して負けを認めなさい！」

一向に飛ぼうとしない和季に焦れ、銃口を向けながら叫ぶセシリア。

クラスメイト達も戸惑う中、一番戸惑っているのは教師である山田先生だ。

「どう言う事でしょうか、最低限の機能しか起動していません！」

管制室で様子を見守る山田先生と千冬、特別に立ち入りを許可された一夏と箒も不安を浮かべている。

「和季…！」

「どうしたのだ、和季、確りしろ！」

声が届かないのは理解しているが、声を出さずには居られない。

「くそ、どうしてだ玄鋼…！」

「どこまでも私を馬鹿にして…地を這うだけのノロマな亀が、空を舞う鳥に勝てると思ってらっしゃるのかしら。降参はまだですの、私も暇じゃありませんわよ」

既に和季を敵とすら見ていないセシリアの言葉、だが和季はそんな言葉死んでも口にする気は無かった。

「冗談じゃない、まだ何も始まっていない、まだ何も成し遂げていない、それなのに此処で諦めるなんて出来るか！！」

「啖呵だけは一人前ですわね…なら！　お別れですわ！！」

セシリアのＩＳ、ブルーティアーズの主兵装であるスターライトｍｋ？が、レーザーを吐き出す。

「ぐッ！」

それを何とか避けるが、行動アシスト機能と最低限のハイパーセンサーだけでは戦いにすらならない。

「中距離射撃型、何より空を自由に飛ぶ私相手に、地面を這いずって勝とうだなんて…甘いにも程がありますわね！」

「くっ！？」

スターライトｍｋ？だけでなく、４基のビット型兵器であるブルーティアーズも執拗に和季を狙う。

ハイパーセンサーの情報から地面を駆け回り、跳び回り、転がり、避ける。

ＩＳを纏うと言うより、ＩＳに似たパワードスーツを着ているレベルの動きしか出来ない。

普通の男性ならとっくに直撃を受けていただろう、高い地力、筋力や身体制御に加え、体力のある和季だからこそ避けられている。

が、直ぐに被弾を始め、やがて肩の装甲を抉られ、地面に倒れる。

「呆れたものですわ…これではただの弱い者苛めです。さっさと降参して下さらないかしら」

セシリアも別に弱い者苛めをしたい訳では無い、ただ自分を差し置いて男という理由だけで代表に選ばれた和季を妬んだだけだ。

代表候補生としての実績とプライドが、そんなふざけた選出は許さない。

もし他に代表候補生が居れば、大抵はセシリアと同じ反応をしただろう。

国家の代表、その座を勝ち取る為に切磋琢磨してきた候補生達。

ぽっと出の珍しいだけの存在に、横から掠め取られるなんて冗談ではないのだ。

「ぬぐ…っ！」

セシリアが攻撃を止めた為、地面から上体を起す和季。

「ぐあっ！？」

だが、直ぐに押し潰されるように地面に顔を付ける事になる。

身に纏うＩＳの重さ、本来なら補助機能で殆ど重さを感じない筈のそれが、重く和季の身体を大地に縛りつける。

「織斑くんの玄鋼、機能の８割が停止！？　シールドバリヤーもＰＩＣも機能してません！？」

半泣きでモニターしている情報を叫ぶ山田先生、時間が経つにつれて和季のＩＳは機能を停止させていき、もはやハイパーセンサーと僅かな操縦者保護システムが生きているのみ。

「和季っ！」

「和季、もういい、もう止めろ！　そんな状態のＩＳでは戦いにならないではないか！！」

アリーナの様子を映すモニターに詰め寄り、悲痛な叫びを上げる一夏と箒。

その様子を見て、表情を険しくさせる千冬。

彼女の脳裏では、どこで試合を中止させるかの判断を考えているのだろう。

もしくは、大切な弟の想いをどうすれば守れるかを。

「……？　なんですの、もしかして用意されたＩＳに欠陥が…？」

流石のセシリアも、いや、代表候補生として試験機の意味合いが強いブルーティーアーズを扱うセシリアだからこそ、和季のＩＳの異変に気付いた。

観戦していたクラスメイト達は、既に、やっぱり男じゃ駄目か、もう見ていられないと顔を背けている。

「ぐ…が…あぁぁぁ…ッ！！」

全身に圧し掛かる、下手をすればトンに達する重さ、それを、それでも、立ち上がろうと両手で地面を押して顔を上げる和季。

左頬には左肩を破壊された時に余波を浴びたのか赤い筋と流れる雫。汗を滲ませ、血を垂らしながらそれでも立とうとする姿に、セシリアは知らず気圧されていた。

「って、血！？　ＩＳの絶対防御すらまともに発動していないだなんて…もうお止めなさい！　そんな欠陥機で、まともな勝負になる訳がないでしょう！？」

流石のセシリアも、こんなフェアじゃない勝負を勝負と認めないのだろ。

オープンチャンネルで叫んだ事で、クラスメイト達も和季の異変が、ＩＳの欠陥である事に気付いた。

アリーナに詰め掛けた全てのクラスメイト達が中止を求めた、こんなのは試合じゃないと、和季に止めるように声を飛ばす。

「――――まだだぁッ！！！！」

「っ！？」

だが、その声を掻き消す位の声が、和季から発せられた。

「まだ俺は…まだ俺は何もしていない……何も成せていない…ッ！！！」

肉体の力だけで重いＩＳを纏った身体を持ち上げ、上体を起す。
這いずるように身体を持ち上げ、重さで今にも倒れそうな身体を、気合と根性だけで保持する。
「やっとなんだ…やっと巡ってきたんだ……やっと俺の番なんだ！！」
「な、なんなの…なんだと言うの…？」
叫びながら立ち上がる和季を、理解出来ないモノを見るようなセシリア。
クラスメイト達も、和季の動きに、声に、ただ見つめるしか出来ない。
「ずっと守られてきた…ずっと守られるだけだった…。大切な家族に、大好きな姉に、守られ、庇われるだけだった…力が欲しかった、守れる強さが欲しかった…！」
血を吐くような慟哭、それは和季がずっと抱えてきた、家族への思い。
偉大な姉と、才を見せる双子の姉への、劣等感の吐露。
「何も出来ない自分が嫌だった、何も力になれない自分が嫌いだった、何をしても誇れない自分が憎かった、何も無い自分を恨んだ！」
我武者羅に強さを求めても、誰かが作った力を求めても。

それは、彼の求める強さではなかった。

「ただ笑って、ありがとうとしか言えなかった！　それしか出来なかった！！　そんな俺が、やっと、やっと手が届きそうなんだ！憧れて、望んで、でも手が届かなくて絶望した夢に、憧れに、やっと手が届きそうなんだ！！」

そう、彼が求めていたのは、ずっと自分達を守ってきてくれた、大切な姉の後ろ姿。

あぁなりたいと願った、あぁなれないと絶望した。

だが、諦める事だけは、出来なかった。

「止められるかよ、諦められるかよ…ッ、やっと巡ってきたチャンスなんだ…やっと俺の番なんだよ、俺が、こんな俺が、大切な人を守れる、守ってもらうだけの存在から、やっと変われるんだ！！」

「……っ」

和季の言葉に、何を馬鹿なとスターライトｍｋ?を握るセシリア。

力も何もない、ただ喚くだけの男が何を偉そうにと。

和季の想いの爆発を見守っていた一夏達だが、それと並行して解析を続けていた山田先生が驚愕を浮かべてデータを千冬に見せた。

「っ、これは…！」

「はい、間違いありません、織斑くんのＩＳは『玄鋼』なんかじゃありませんっ、あれは凍結された第一世代ＩＳ、『黒型（くろがた）』です！」

「黒型…？」

「なんなのですか、黒型とは…！？」

山田先生の言葉に、詰め寄る二人。

そんな二人を押し止め、口を開いたのは千冬だ。

「黒型は初期に作られた第一世代の中で、もっとも高出力を出せるＩＳコアを使って造られた、当時最高の性能を持ったＩＳになる予定だった機体だ…」

日本の複数の企業、打鉄などを作ったＩＳ企業の前身の研究所などが集まって造られた、第二世代の指標を目標に作られた機体。

その為、４６７個のＩＳコアの中から、一番出力の高いＩＳコアが選ばれ、搭載された。

束の造ったＩＳコアは全て同一に思えるが、個々に性能が異なるコアがいくつか存在していた。

そのコアを使って造った機体、『黒型』は、期待とは裏腹に最悪の結果を残した。

「当時のＩＳ操縦者、私を含め、あらゆる人種の女性、それこそ歴代ヴァルキリー達でも、最低限の機能しか起動させられなかったのだ…」

それゆえ、致命的な欠陥機として、凍結。

当時の最先端技術を積み込んで造られた機体なので、コアの交換などで使おうとしたが、他のコアでは満足に起動すら出来ず。

黒型のコアも、どういう訳か他のＩＳに搭載しても起動しない。

その為、コア共々凍結処分され、ＩＳ管理委員会の機密倉庫に埃を被ったまま放置され続けた機体。

世界一高価な鉄クズや、存在しない事になった機体などと呼ばれ、コアも使えないコア、存在に値しないとされ『バニシングナンバー』に記載されてしまった。

それが、何故か、どういう訳か、和季のＩＳとして送られてきた。

本来の玄鋼は、担当企業の倉庫で解体され、別の機体に組み上げられて。

「つまりあれは、誰かが黒型を回収・第３世代へと組み換えを行って摩り替えたのだ…」

「誰がそんな事を…」

予想がつかずに顔を顰める山田先生だが、千冬も一夏も、そして何より箒は予想がついた、と言うか他に考えられない。

篠ノ之　束、全てのＩＳのコアを生み出した天才。

彼女なら、凍結処分された黒型を回収して玄鋼のパーツを使って組み替え、すり替えるなんて造作もない。

「あの人は…何故いつもいつも…っ！！」

拳を握り、実の姉への怒りを燃やす箒。

その時、アリーナの状況が動いた。

終に立ち上がり、上空のセシリアを睨む和季。

それを冷たい目で見下ろしていたセシリアが、スターライトｍｋ？と４基のブルーティアーズの銃口を全て和季に向けていた。

「貴方の意思と努力は認めますわ。けれど、それでどうにかなるほどＩＳは甘くはありませんの」

「ぐ…ッ」

「今度こそ、お別れですわね。さようなら」

冷たく言い放ち、引き金を引くと共に周囲のブルーティアーズに命じて、ＩＳの装甲だけを狙うセシリア。

ＩＳさえ破壊してしまえばもう終わりだ。

多少の怪我は、教訓として刻んでもらう。

ＩＳに絶対のプライドを持つセシリアに、躊躇いは無かった。

迫るレーザー、敗北の、舞台の幕引き。

――これで終わりなのか…

走馬灯のように今までの人生が脳裏に流れる和季、ハイパーセンサーの影響かレーザーが遅く感じる。

――これで終わりなのか…

ずっと、愚直に走り続けて、ここまで来たのに。

――こんな終わりなのか…

所詮自分は、そこまでの人間だったのか。

――嫌だ……

まだ終われない。

――嫌だ……！

まだ自分は何もしてない。

――まだだ……

自分はまだ、何も出来ていない。

――まだだ……！

自分はまだ、何も証明出来ていない。

――俺はまだ……

自分の存在を、証明出来ていない。

――自分を捨て切れない…！！

――力が欲しい…力が、誰にも負けない、誰にも恥じない、何にも揺るがない、何にも屈さない……

――誰かを、大切な人を…家族を守れる…力が欲しい…力が欲しい…！

――頼む『黒型（くろがた）』、俺に力を、一度だけでも良い、俺が、俺として居られる力を……

――織斑　和季として、存在を証明できる力を……！

――頼む『黒型』……俺に、俺が俺として居られる力を…！

「黒型ァァァァァァッ！！！！！」

直撃の瞬間、和季が叫んだその時、ドクンと何かの鼓動が響き。

「なっ！？」

セシリアが。

「これはっ！？」

山田先生が。

「何が…！？」

箒が。

「あいつめ…動かない岩を動かしたか…」

千冬が。

「和季……そうだよ、それでこそ和季だよ…！」

そして一夏が見守る中、撃的な変化が訪れた。

それは、世界の片隅で静かに産声を上げた。

長年空を見上げる蝶を眺めるしかなかった日々に終焉を向え、今、やっと羽化する。

――ハッピーバースデー、かずくん☆　今日から君は正真正銘の『織斑　和季』だよ♪――

世界のどこかで誰かが楽しそうに呟いた。

「まさか…一次移行！？　まともに動くことすら出来なかったのに…！？」

セシリアが驚愕を浮かべる、自らが機体を壊す為に放ったレーザーは、黒鋼…いや、黒型の放つシールドバリヤーに弾かれた。

そしてクラスメイト達を含めた全ての観客達の前で、鉄クズと称されたＩＳと、ずっと殻を破ろうとしていた男、“二人”の羽化が始まる。

鈍重とすら言えた装甲が、形と色を変え、和季の、『織斑　和季』の機体として生まれ変わる。

もはや鉄クズでも欠陥機でもない、待ち望んだマスターを得た機体は、主の最強を証明する為の剣であり、守る為の楯へとその身を変える。

それは、撃的な進化だった。

名前に黒とありながら灰色だった装甲が、黒と金、そして灰色を織り交ぜた色へと変化。

屈強さを表す巨大な非固定浮遊部位であり、『Γ』字の形をした肩装甲、股関節から足の先まで他のＩＳのように歩く事を想定していない足とは違う、確りと大地を踏み締める脚部装甲。

背中にはランドセルとも称されそうな大型のスラスターユニット。

その左右、両肩の後ろにはやはり非固定浮遊部位の大型シールドのようなスラスターユニットが２基。

ボディを守る装甲もシャープに、しかし堅牢な形に。

スマートになると共に重厚感を増し、白式が白亜の天使、白い騎士なら、黒型は黒鉄の守護者、黒い重装兵か。

目を引く両肩の装甲と、両足の左右、胸部装甲などが黒で、手腕や両足の正面ラインが金属質な光沢の灰色。

それらに走る金色のライン。

将軍のような威圧感を放つ力の証明が、そこに居た。

「黒型を一次移行させたか…」

「い、今までどんな操縦者も、それこそ織斑先生を含めたヴァルキ

リーやブリュンヒルドすら出来なかったのに…凄い、凄いですよ織斑くーん！！」

安堵を表情に滲ませながらも、どこか誇らしげで嬉しそうな千冬と、キャーキャーたゆんたゆん騒ぐ山田先生。

「和季……あの馬鹿者…！」

滲んでいた涙を拭いながら、ゆっくりと空へ舞い上がる和季の姿を見つめる箒。

「終に…終にやったんだね和季…おめでとう、最高に…カッコ良いよ…」

そして、涙を流しながら、弟の羽化を祝福する一夏。

「欠陥機と思いましたけど…誤認だったようですわね」

「待たせた事を先ず謝罪する、セシリア・オルコット。どうやら俺の相棒は寝ぼすけらしい」

空に舞い上がり、同じ視線になった二人。

「構いませんわ、やっと本来の試合が始められますもの。私、弱い者苛めは嫌いですので、先ほどのような無様は晒さないで下さるかしら？」

「あぁ、やっと証明出来る。俺が俺である事を…『織斑　和季』である事を！」

「意味の分からない事を…お行きなさいブルーティアーズ！」

「っ！」

放たれ、殺到する４基のビット。

それを、的確に避けて飛びまわる和季と黒型。

「速いっ、一次移行したとは言え、あれがあの無様な姿を晒したＩＳなんですの！？」

初めて空を飛んだ鳥のように、羽が形になり飛び立った蝶のように。

和季は今、全力で空を舞っていた。

「飛んでる…空を飛んでる……また飛べた、また俺はここに来た！」

入試の時の短い間だけ打鉄で空を飛んだ感覚が蘇り、黒型と飛ぶ感覚がそれを塗り替える。

「あぁ、飛べる、俺はこの空を飛べる！　一夏と同じ空を…千冬姉が飛んだ空を！！」

「このっ、私を無視するんじゃないですわ！！」

空を飛ぶことに夢中になっている和季に苛立ちを覚え、執拗に攻撃するが当たらない。

「織斑の名は伊達ではないと言うの…ブルーティアーズ！」

自慢のビットで和季を追い立てるセシリア、彼女の中にあった和季への確執も侮りも嘲りも消えていた。

ただ、警戒すべき敵として認識していた。

「武器は…両手と両足の衝撃貫通装置…なんだこれ！？」

データウィンドウに表示される黒型の装備は、両手の拳と両足の裏および甲に装備された、衝撃貫通装置のみ。

これは、シールドバリヤーを持つＩＳ相手を想定した対ＩＳ装備の先駆け。

装置の前面に発生させた自機のシールドバリヤーと相手のシールドバリヤーを接触・共振させて中和し、そこにピンポイントで衝撃を撃ち込むという物。

ＩＳの高い防御力の象徴であるシールドバリヤーをほぼ無効化する上に、装備や相手本体へ直接衝撃を撃ち込む事から、シールドブレイカーとすら呼ばれる装備だ。

絶対防御を必ず発生させ、その上で衝撃を操縦者に直接届かせる為、一夏の白式やその前身である暮桜の単一仕様能力・零落白夜並の効果が期待出来る。

ただ、その性質上、近接どころかほぼ零距離での運用が絶対であり、その上シールドバリヤーを中和すると言う事は、自分のシールドバリヤーも中和されている事になる。

あまりにも博打要素が強く、おまけに搭載された機体が黒型だった

為に開発はそこでストップ。

実質、搭載している機体は黒型とその前身である機体のみ、こちらは解体され別の機体へ生まれ変わっている為、もう黒型の持つ装置しか存在しない。

それ以外の武装が無いのは、凍結処理されていた黒型だからだ。

元々が第一世代の後発機であり、第二世代の雛形を想定して後付武装が用意されていたが、機体そのものが凍結処理された為当然既に存在しない。

機体本体に搭載された武装はこれだけなのだ。

“今の”黒型の姿の場合は、だが…。

———さぁ、その子の可能性を見せて見せて、かずくんの信念で、可能性をお姉ちゃんに見せるのだー♪———

世界の何処かで笑いはしゃぎ踊る女性の声。

それが聞こえたかどうかは不明だが、和季は追い掛けて来るブルーティアーズにあえて向き直る。

先ずは邪魔なビットを、そう思って反撃してくる事など、セシリアには手に取るように分かる。

「その様な手…何度も見てきましたわ！」

ビットを引かせ、誘い出すと同時にスターライトｍｋ?で狙い打つ。

「くっ！」

咄嗟の判断で直撃を肩部装甲で防ぐと、予想以上の効果が見受けられた。

シールドバリヤーで防いだのとは違う効果、装甲がレーザーを弾いたのだ。

「対レーザー膜！？　まだどこも開発段階の成膜装甲を何故…！？」

「ありがたい…俺には過ぎた最高のＩＳだ！」

レーザーが効かないなら多少の無茶が利く、スラスターを吹かし飛翔する和季と、主の命を受けて追撃するビット。

ブルーティアーズが動いている間、セシリアがあまり動かないのは和季も既に気付いていた。

だが、黒型はパワーと直線での加速はあるのだが、細かい機動、運動性能はそれほど高くない。

一夏の白式と比べると良く分かるが、あちらは高機動近接戦闘、こちらは重装甲格闘型。

ブルーティアーズをいなしながらセシリアを狙うには機動力と細か

い動きが足りない。

「だが突破力なら…！」

細かい事など一々考えるのは性に合わない。

自分が出来る事はただ突き進む事。

そしてそれを助けてくれる頼れる相棒が今はその身を守っている。

「行くぞ黒型！　お前の可能性を知らしめろ！！」

非固定浮遊部位のスラスターと背部スラスターパックが咆哮を上げる。

直線での爆発的な加速は、ピーキーながら高スペックの白式に匹敵する。

「おぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

被弾覚悟でブルーティアーズを蹴散らし、セシリアに迫る和季。

両手の衝撃貫通装置『シールドブレイカー』が起動、甲高い音を立てる。

「――――ふふ、お生憎様」

「っ！？」

「ブルーティアーズは…６基在ってよ！！」

セシリアのＩＳ、そのスカートアーマーから放たれたのは、それまで存在を感知させなかった、ミサイルタイプの自立誘導兵器。

ミサイルタイプ故に一度しか使えないが、正確な命中率と威力は切り札として十分に機能する。

それが、加速により止まる事が出来ない和季に迫る。

―――まだだ…まだだろう黒型！　お前の可能性は…この程度じゃない筈だ！！

和季の心の叫び、それに答えるように黒型の装甲が展開した瞬間、ミサイルとシールドバリヤーが接触して爆発。

「しぶとさだけは見上げたものでしたけれど、存外あっけない終わりでしたわね…」

空中に広がる爆煙を見下ろしながら、戻ってきたビットを撫でつつ乱れた息を整えるセシリア。

高威力のミサイルタイプ２基の直撃、ＩＳの絶対防御で死にはしないがシールドエネルギーは大きく削られ、大抵のＩＳは機能停止に追い込まれる。

誰の目にも分かり易い勝利だ、這いずり回っていた男子の奇跡の復活からの逆転劇を期待していたクラスメイト達は落胆し、やはり男では…と現在の風潮を納得した時だった。

ブルーティアーズのハイパーセンサーが煙の中で明確に動く存在を感知した。

「なっ！？」

次の瞬間、煙の中一瞬光った赤い光りと共に、煙を切り裂いて現れたソレ。

『オォォォォッ！！』

通信越しの音声を響かせセシリアに飛び掛るそれが振るう鋭利な爪は、咄嗟に回避した彼女の機体の末端と、命令を出せずに浮遊していたビットを一基切り裂いた。

「な、あの直撃を受けて…それにその姿…！？」

『言っただろう、黒型の可能性と…』

飛びかかった勢いのままアリーナの地面に滑るように降り立ち、見上げてくる赤いセンサーアイ。

カラーリングこそ黒型だが、その形状を大きく変えていた。

「ど、どうなって…まさか二次移行か！？」

「いいや、違うな…」

モニターを見ていた箒が慌てるが、千冬が冷静に分析していた。

「はい、観測しているデータを見る限り二次移行ではありません。恐らく、あれが一次移行した黒型の固有機能かと…」

今まで誰も一次移行をさせる事が出来ず、設計・搭載された機能を発現させる事が出来なかった。

凍結処理されてからは研究資料もほぼ破棄され、正確な黒型の能力を知る者は少ない。

「可変装甲による形態変化…装備から見るに、強襲突撃型か…」

解析されたデータを眺めながら呟く千冬。

装甲を変形させて機能を変更する技術は既に存在する。

だがそれは武装や装甲一部の話しだ、黒型のように全体で姿の印象が変わる程の変形を見せるのは未だ存在しない。

「（一部に展開装甲の技術も見受けられる…やはりお前か、束…）」

何かと無茶苦茶な友人の能天気な笑顔を思い出して、とりあえず今度遭ったらぶん殴ろうと決意する千冬さん。

大きく姿を変えた和季と黒型に、セシリアのみならずクラスメイト達も驚きを隠せない。

機械的な装甲手腕には、恐らく肩部装甲だった物が手腕を挟む形で合体し、肩の突起が三本の爪として機能している。

非固定浮遊部位の肩部装甲があった部分には、両肩後ろに浮いてい

たスラスターが代わりに移動して肩部装甲へ。
胸部装甲は腰の後ろから伸びた装甲が胴体を守り、両足の左右の装甲が展開し中からスラスターを覗かせている。
そして、背部バックパックの上部装甲が可動し、和季の頭部を完全に覆っている。
肩から上が露出していたのが、今では完全に隠れてしまっている。
見る者に威圧感を与えると共に、さらに重装甲となった黒型。
『これが、黒型の可能性の一つ…そう、これは…強襲突撃形態『月甲（げっこう）』だ！』
「くっ！」
地面を滑るように飛翔し、両手のクローユニットを掲げる。
2本と1本でアームとクローを両立したそれの根元には、左右それぞれ違った銃口が。
左の銃口からは絶え間なく弾丸が吐き出され、ビットの一基を破壊。
「射撃武装が！？　形を変えると同時に武装も変化したと言うの…！」
残ったビットを放ち、距離を取るセシリア。
どういう訳か、現在の姿だと自由に空は飛べないらしく、和季は地

面を滑るように移動している。

「最初の再現ね、地を這う亀が鳥を――――」

セシリアの口撃（誤字に在らず）を黙らせるように放たれたのは、眩い閃光。

まだ実装が始まったばかりの光学兵器であるレーザーが、右手の方から放たれた。

その光りはビットを打ち抜き、残りは一基。

「（レーザー兵器まで！？　いくら用意された専用機とは言え、幅が広すぎますわ。まるで、その場で必要な武器を装備しているかの如く…！）」

戦慄するセシリア、連射・即射の利く実弾兵器と威力のレーザー。

まるで和季が求めたモノを与えるかのような機体の変化。

「ですが、その程度でぇぇぇっ！！」

スラーライトｍｋ？を構え、確実に命中させるセシリア。

だが和季の黒型は、対レーザー膜が張られた装甲、元は肩部のそれが今は両手にある為、それで防ぎきる。

シールドバリヤーは確実に減っているものの、確実なダメージには届いていない。

『俺は千冬姉にも、一夏にも勝てない…二人には成れない！』

「っ、何を突然…！」

セシリアの攻撃を回避しながら叫ぶ和季。

顔は隠れて表情は見えないが、オープンチャンネルの声はセシリアのみならず見守る全員に届く。

『何度も二人を羨んだ、何度も勝手に嫉妬してその度に馬鹿をやった、結局二人が居なければ俺は何も出来ない子供だった！』

「だから何を言って！」

反撃の銃弾、だが近接使用の武器なのか、弾丸もレーザーも一定の距離を取ると途端に命中率が下がる。

それに射撃訓練はドイツ軍で歩兵訓練を受けた時のみで、その後は銃に触る機会などある訳もなく。

当たらない鉄砲など怖くないと、距離を取って射程の長いスターライトｍｋ？で地を滑る和季を狙うセシリア。

だが有効打を与えられない焦りが確かに彼女の中に生まれていた。

『だがやっと、やっと俺はここに立てた！　織斑　和季として…二人の家族として、弟として誇れる場所に！！』

「いい加減、その煩い口を閉じなさい！」

セシリアの台詞に、いや、あんたが言うなと思った生徒は多かったが今は置いておく。

『もう残りカスとは言わせない、もうお荷物とは言わせやしない！
今度は俺が…俺が家族を、大切な人を……守るんだーーーーっ！！！』

動きを止めた和季、好奇とばかりに放たれたレーザー。

だが着弾する前に、和季の黒型の両足が、アリーナの特殊合金製の床を衝撃と共に破壊し、その下地のコンクリと土を盛大に巻き上げた。

両足に装備された衝撃貫通装置を使っての、破砕での煙幕。

「な、煙幕のつもりですの！」

叫ぶセシリアだが、その表情は焦りが浮んでいる。

何せセシリアの武装は全てレーザー兵器、大気中ではただでさえ減衰すると言うのに、ああも派手に砂塵を撒かれて姿を隠されては、ただでさえ重装甲で対レーザー膜を持っている相手だ、効果が期待出来ない。

「ですが、出てきた時が貴方の最後でしてよ！」

狙いは完璧とスターライトｍｋ?を構えるセシリア。

ハイパーセンサーは砂塵の中の黒型を正確に捉え、飛び出てきたそれを目でも追う。

「なっ！？　腕のユニットだけ…！？」

だが、飛び出してきたのは、なんと両手に装備されていたクローユニット。

それが量子ワイヤーを伸ばしながら襲い掛かってくる。

「く…もう一つ！？」

避けたセシリアだが再び砂塵の中からクローユニットが飛び出し、それが体勢を崩したセシリアを終に捕らえた。

左足を爪で確りと捕まれたセシリア、スターライトｍｋ？では砲身が長く撃ち難い。

故に、残った最後のビットに攻撃を命令した瞬間、避けた最初のクローユニットが量子ワイヤーで引き戻されながら戻ってきて、ビットを喰らい、そのままセシリアの右手をスターライトｍｋ？ごと押さえ付ける。

「く…ですがこの程度で…！」

シールドエネルギーがガリガリ減っているのを見ると、爪自体にも何かの効果があるのだろう、ビットを一撃で破壊した事から超振動近接爪か。

「（インターセプターを…ダメ、今の私では時間が…！）」

捕まった以上は次の展開も予想できる。

砂塵が風にながれ、姿を現した黒型。

『飛ぶ鳥、捕らえたぞ…！』

自らを射抜く赤い眼光のような四角いセンサーアイ。

次の瞬間、量子ワイヤーが引き戻されぐんっと身体を引っ張られるセシリア。

「ぐぅぅ…！」

落ちてなるものかと機体の推進を全開にして抵抗する彼女だが、和季の狙いは落す事では無い。

『お前は俺が捕まえたッ、もう逃がさんッ！！！』

咆哮と共にスラスターを轟かせ空中へ飛び立つ黒型。

そしてセシリアの高さを越えた所で、装甲が展開し、元の黒型へと戻る、違うのは肩部装甲が未だクローユニットのままな点か。

顔を覆っていた装甲がバックパックへ戻り、素顔が露になる。

その真っ直ぐな、セシリアしか見ていない瞳に、一瞬ドキリとする彼女。

量子ワイヤーが繋がるのは肩先、つまり両手は自由。

そしてその両手には、シールドブレイカーが搭載されている。

「刻め！　これが俺と黒型の――――俺達の決意と力だぁぁぁッ！！！」

放たれた拳、その前面に展開されたシールドバリヤーがセシリアのシールドバリヤーに強制関渉し中和、そして本命の衝撃が拳と共にセシリアに打ち込まれた。

「か……は……！」

全身を貫く衝撃とダメージ、絶対防御でも衝撃までは殺しきれない為、セシリアの全身は強烈な衝撃の３割程度を受ける結果となった。

絶対防御も発動した上に削られていたシールドエネルギーは０となり…セシリアのＩＳは機能を停止。

一撃で致命的なダメージを機体と、操縦者にも与えるピンポイント攻撃。

直撃すれば抗う事は難しい、一撃必殺。

『試合終了！　――――勝者、織斑　和季』

試合終了のアナウンスと共に、クラスメイト達が沸いた。

ゆっくりと落下するセシリア、衝撃に身体が揺さ振られ、軽く意識が飛びかけている。

絶対防御があるので地面に落下しても支障は無いが、それに気付いたクラスメイト達は彼女が落ちる姿に目を覆い…直後に歓声が木霊

した。

拳を振り抜いてセシリアを通り過ぎた和季が直ぐに舞い戻り、彼女を抱き止めたからだ。

この瞬間、管制ルームで異様なオーラ、主に嫉妬と殺意と羨ましい等が主成分なソレが二つ放たれ。

山田先生がブルブル震えているが和季は気付く訳が無く。

「ぁ……――――！　な、何を…！」

飛びかけた意識が戻り、和季の腕に抱かれている、要はお姫様抱っこ状態に気付いて慌てるセシリアだったが、次の瞬間ギョっとした。

和季が泣いているのだ、両目から涙を流して。

「……ありがとうオルコット」

「え……」

抱き止めている相手が突然涙を流し、その上自分に礼を言い始めた。

礼を言うのも、と言うか負けたのだから謝るのは自分だと思いながら見上げていると、空を見上げていた視線をセシリアに落す和季。

その瞳は、酷く穏やかで、そして希望に輝いていて。

知らず頬を赤く染めるセシリアを、試合中ともその前の今回の試合の原因の時とも違う優しい瞳で見下ろす和季。

「君のお陰で、俺はやっとここに立てた…立って、最高の相棒と出会えた…やっと俺はスタートラインに立てたんだ…」

やっと俺は『オリムラ　カズキ』を胸を張って名乗れると、和季は涙を流しながら呟いた。

「ありがとうオルコット、こんな俺と戦ってくれて。君のお陰で俺は…やっと走る方向を見つけられた」

我武者羅に、直向に。

しかし道が分からず彷徨い続けた日々は、今日で終わる。

やっと自分のスタートラインに立てた。

やっと、自分だけの目標を見つけた。

あとはただ、今まで通り只管に、走り続けるのみ。

そんな決意を改めて胸に刻む和季を、セシリアは腕の中から見上げるしか出来なかった。

試合終了後、怒涛の展開に沸くクラスメイトの祝福もそこそこに、和季は千冬に呼び出しを受け…正座してお説教を受けていた。

勝ったのに何故…という思いは大きいが、ＩＳを教える人間としては和季の無茶は看破出来ないのだろう。

事実、最初の頃は絶対防御の発動もしたかしないか不明だったのだから。

「そして、お前のＩＳ…玄鋼ではなく「黒型なんでしょう」…何故知っている？」

ＩＳがすり替えられていた事実を告げると、和季は平然と相棒の本当の名前を口にした。

試合中も何度も口にしていた事から、恐らくその時に知ったのは予想できるが。

「何でだろう、頭にこいつの名前が浮んでさ…気付いたら名前を呼んでたんだ」

そう言って待機状態になった黒型…右手に嵌められたオープンフィンガーのナックルガードを見つめる。

「そうか…」

千冬はそれ以上の追及はせず、こんな奇跡は二度は起きないぞと釘を刺し…しかし去り際に和季の頭を軽く撫でた。

「よくやったな、和季。だが勘違いするな、ＩＳで勝とうが強くなろうが…お前が私の大事な弟である事は変らんからな」

そう言ってニヤニヤする山田先生を連れてその場を後にする千冬。

その後、廊下から山田先生の悲鳴と「私はからかわれるのが嫌いだ」発言が聞こえたので、どうやらお仕置き中らしい。

「お疲れ様、和季」

「見事な啖呵と決意だったぞ」

「あ、ありがとう二人とも…今思うと俺、なんであんな事叫んだんだ…」

今になって恥ずかしくなってくる和季、どうもＩＳを身に纏った高揚感と負けたくない意地から、かなりハイになって今まで胸に秘めてきた事を吐露してしまったらしい。

照れる和季の右手を一夏が、左手を箒が腕を組むように掴み。

「な、なんだ二人とも、いきなり…」

「んー、何ってそんなの……お仕置きに決まってるじゃない」

「あぁ、決まっているな」

「ゑ？」

輝くような笑顔で告げられた言葉は、無慈悲な宣告だった。

何故、何故にと混乱する和季を連れて部屋へ戻る一夏と箒。

その後、織斑姉弟の部屋から延々説教染みた言葉が聞こえ続け、夕食にやってきた和季はやつれ、誰も声が掛けられない状態だった。

「織斑……和季…」

冷たいほどではないが、ひんやりと感じるシャワーを浴びて呟くのはセシリア。

脳裏を占めるのは、今日戦った相手の事だけ。

静かで穏やかな面とは裏腹に、己の信念を貫き、誰が相手でも引かず媚びず、枉げない男。

自分が知る男とは何かが決定的に違う初めての男。

強い決意を瞳に刻み、そしてそれを成し遂げようと直向に努力を続ける姿。

それはどこか、両親が残した遺産を守る為に努力していた自分と重なった。

あぁ、彼も、愛する家族の為、誰にも渡したくない何かの為に突き進んでいるのだと思うと、胸が熱くなり、そして締め付けられる。

「織斑……和季……」

自分を倒した相手、試合の後に聞いた、あの織斑　千冬でもまともに動かせなかった欠陥機を一次移行させた男。

自分が知る男（嫌いな奴等）とはまるで違う、そう、理想の、捜し求めた運命の相手…。

「織斑…和季…」

出合ってしまった、そして囚われてしまった。

―――『お前は俺が捕まえたッ、もう逃がさんッ！！！』―――

あの台詞を思い出すだけで身体が歓喜に震え、お腹の奥の大事な場所が疼く。

――――あぁ、私はもう逃げられない……――――

身も心も囚われた青い鳥は、もう逃げる事は叶わない。

――――「……ありがとうオルコット」――――

「お礼を言うのは私ですわ、和季さん…」

さようなら、意地っ張りで虚勢を張っていた私。

初めまして、自分の思うままに生きる新しい私。

「覚悟なさってね、和季さん…私、貴方の全てが知りたいの…」

熱に浮かされたセシリア、彼女の熱は冷水などでは取りきる事など最早不可能であり。

恋する戦乙女が、また一人誕生した瞬間だった。

「ん……」

「む……」

「？　どうかしたのか二人とも…？」

夜の一夏と和季の部屋。

遊びに来た、と言うか基本的に毎晩箒がやってきて就寝時間まで過ごすのだが、和季の入れたお茶を飲んでいると途端に二人が固まった。

こう、ピキーンと何かを感知したかのように。

「いや、ちょっとね…」

「あぁ、悪い予感がしただけだ…」

恋愛のライバル的な意味で。

そして二人の勘は見事的中する事になるのだった。

試合の翌日、和季が勝利した事でクラス代表は彼に決定した。

そう言えばそれを決める為の試合だったと、セシリアに一夏への謝罪をさせる事しか考えてなかった和季は、大役に頭を抱え。

「ですが、和季さんはまだＩＳを動かしたばかりの初心者。ここは経験豊富な私がですね、専属の指導をすれば、その、今よりも…」

モジモジとしながら熱っぽい視線で和季を見るセシリアからは、当初の態度はまるで見つからず。

因みに確りと一夏には謝罪済み。

「お生憎様、和季は私が教えるから良いの、私だって代表候補生だし」

一夏が額に青筋立ててセシリアを迎撃し。

和解したけどそれとこれとは別問題なので。

「私は和季に　直　接　教えてくれと言われたからな、仕方が無いが　直　接　頼まれたしだな！」

箒は箒で面倒臭い言い訳をしながら混じり。

因みに直接頼んだのは剣道の練習相手と筋トレでありＩＳは頼んでいない。

「かずっちー、カッコ良かったよ～、ご褒美に私を抱いていいのよー」

「何だか良く分からないけどありがとう？」

腕に抱きついてくるのほほんさんをお姫様抱っこしつつ、クラス中から向けられる熱っぽい視線に、背筋を震えさせる和季が居た。

「はぁ…面倒だけは起すなよ貴様ら」

『は～い（ハートマークだらけ）』

千冬さんが釘を刺すも、分かっているのはどれだけ居ることか。

今時珍しい男らしい啖呵と、力強さ、そして優しさ。

おまけに世界で唯一ＩＳを動かせる男にして、織斑姉妹の弟。

超が幾つ付くか分からない位の優良物件に成った和季。

彼の苦労と修羅場はこれからだった。

「ちょっとーっ、あたしの出番の前に終わるとか在り得ないじゃないっ、あたし絡みのエピソードだって沢山、ちょっと聞いてるのコラ待ちなさ――」

次回に続く？

願いと力と産声（後書き）

キリの良い所で終わってみました、と言うかこれ以上だと文字制限突破するのか…。
よくある設定の中で見れる物にするのは大変ですねこれ。
暇潰しに楽しんで頂けたでしょうか、私自身まだＩＳはアニメ＆漫画から入り、現在原作を読んでいる途中ですので、食い違いや破状も多いと思います。
特にキャラクターとか口調とか。
誤字脱字と一緒で指摘して頂ければ直します。

あと書く事は…オリ主のＩＳに関してですかね、完全オリジナルじゃ読者に説明しにくいし姿を想像し難い、かと言って有名どこ（ガンダムとかＡＣとか）だと他の人と被ったりしますしね。
なので、適度に有名作品で割とマイナーで、かつ一風変わった奴を基本モデルにチョイスして、後は適当な武器とか設定とか足して見ました。
分かる人居ますかねぇ、アスクレプオスとか…と言うか結局ガンダムしか浮ばなかったです。
本当は敵系の機体をモデルにしたかった、私そっちの方が好きな人間ですので。
候補にはトールギスとかノイエとかハイゴックとかありました、マニアックですね私。
でも一応主人公の機体なんだからと思い、何かないかと考えていたら、該当したのがアスクレ。
一風変わった（ズゴックな見た目からガンダムですよ）に該当してカッコ良い、そして程よいマイナーな彼。
これにオリジナルな「ぼくのかんがえたせんとうけいたい」足してしまえと想像したのが黒型です、要はＩＳ風アスクレ？

名前は分かり易くかつ見た目のイメージを想像しやすいのを理由に、ほら、月甲ってなんか蟹っぽく感じないですか？　あ、私だけ？
因みに黒型は一夏が白なので黒、単純な方が良いかなと思って。
中二成分は主人公だけで十分かなと。

ＩＳ名が黒型、ズゴックな形態名が月甲、月甲形態とかそんな感じ。
因みに基本形態は雷天（らいてん）、あと１個はまだ秘密ー。
でも月甲・雷天（本来は雷電）と来たら分かっちゃう人居るでしょうね…。

次の話は書き上がり次第上げますが、私、話数を区切るの苦手なので、たぶん鈴編を書き終えるまでになると思います。
私生活や仕事もありますので、気長にお待ち下さいませ。

長くなりましたが、最後にこのお話を読んで下さってありがとうございます、良い暇潰しになりましたら幸いです。

ではまた次のお話で。

チラシの裏情報：実は最初はゾイドの蒼い竜をＩＳ風にしようとしてました。
名前はそれの名残…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2513t/

IS－証ー

2011年5月14日08時30分発行